

(別紙資料)

水産総合研究センターは、クロマグロ稚魚のヨコワの数を予測する技術を開発するために、2007年度から主要な産卵場である南西諸島海域において、ヨコワ以前の稚魚の生態調査に取り組んでいます。

ヨコワの漁況は、年によって大きく変動することが知られており、それにはふ化後の成長速度や生き残りが関係すると考えられています。これを検証するためには、稚魚を採集してその生態を明らかにする必要があります。クロマグロは、ふ化後2週間前後までは調査船のプランクトンネットで採集されます。また、ふ化後1～2ヶ月のヨコワになると養殖用種苗として漁船で採捕されます。ところが、その中間のふ化後約2週間～1ヶ月程度の個体はこれまでわずかしか採集できなかったため、ヨコワとなって漁獲され始める直前の生態が謎となっていました。

本年6月、当センターは、稚魚を採集するために改良したトロール網を使った調査を実施し、生後2～3週間と推定されるマグロ類の稚魚230個体の採集に成功しました。また、DNA分析の結果、採集された稚魚の約3分の1がクロマグロであることが確認されました。体長2cm前後のクロマグロ稚魚を多数採集できたことは、我が国だけでなく世界でも初めてです。

今回の調査により、ヨコワになる前段階の稚魚の採集法が確立されるとともに、稚魚が黒潮近くの表面水温26～27℃の海域に多く生息することが明らかとなりました。これは、稚魚期の生態解明の糸口となるものであり、クロマグロ資源の動向を早期に把握し、資源管理にも貢献するものです。また、その年の漁獲対象となるヨコワの量が多いか少ないかを早期に判断することが可能になり、クロマグロ養殖において出荷量を調整するなど養殖経営の安定化にも役立つものと考えます。